

高校教員が模索する「波」の歴史 — 高大の声を聞きながら —

中央大学附属横浜中学校・高等学校 柴 泰登

はじめに

私は2017年8月、マリ共和国を訪れる機会があった。そこで目の当たりにしたのは、首都パマコでも未舗装の道路、雨期なのに断水する水道、さらに地方に向かえばその水道すらなく、ガス・電気などあらゆるインフラの無い生活があった。しかし内戦が続くマリに支援を行う団体は少なく、最後の夜、一介の旅行者でしかない私にガイドは跪き、「私たちを救ってほしい」と懇願した。そうした体験をしてから成田空港に戻ってきたとき、モノがあふれる豊かな「日本」との違いを私は改めて強く意識した。

自分は、この世界状況に強い奇異の念を抱いた。「なぜこのような格差が生じているのか」自問せずにはいられなかった。そして、高校教員としてこの現実を生徒に伝えていかなければならないと決心した。

しかし、日本における世界史教育の環境は悪化している。内向きになっているといわれる日本人は、若年層でも同じ傾向にあるのか、高校段階における「世界史 B」の選択者数は年々減少の一途をたどっている。ただし、この敬遠の風潮には「世界史は理解しにくい」という技術的な問題も含まれている。確かに、日本史と比べて単線的な構成となっていない世界史のカリキュラムは、教えている側からしても「生徒の理解に混乱をきたす」ことを覚悟して授業を展開しているという忸怩たる思いがある。

では、その原因は何か。一因には、世界史が「1つのストーリー」にまとめられていないことにあると思う。大学の現場では、世界史は地域・時代ごとに専門が細分化され、精緻な史料研究による実証性を担保するために帰納的な方法論が主流となっている。そういった大学教員が主導して作られる教科書は、「全時代・全地域を教える」という命題を持っている高校段階の要求に応えられない場合も生じているように思う。しかし、大学の教員側が今の方法論を捨てて演繹的な手法で研究を行うことは、下手をすれば自らのキャリアを失いかねない危険な行為であることは、約十年間学究の世界にも身を置いていた自分の経験から容易に想像がつく。だからこそ、高校教員がその間隙を埋めることの価値が生じてくる。今回ここで紹介する『「波」の歴史』は、大学側の学究の成果（おもにグローバルヒストリーを主題とした著作）を利用しながら高校側の教育の現実に対応する試みの一例である。その目標は、中堅世代として数年後ではなく「数十年後に世界史をどう教えたら良いのか」を考えることである。そういった面で、まだ構想段階の部分が多い未完成の発表である。その点をご容赦いただいたうえでご批評をいただけたら幸いである。

1 「波」の歴史に至るまで

これまでも、国家単位を超えた大きな単位で世界史を捉えようとした研究者は少なからずいた。第二次世界大戦後に限っても、地中海をフィールドとし、歴史を3つの要素に分割して重層的に理解しようとしたF.ブローデルに始まり、国家間の横断的な関係性に着目し、「中核」と「周辺」（と「半周辺」）という概念で世界の構造を捉えようとしたI.ウォーラーズテインについては、ここで詳しく取り挙げるまでもないだろう。そして、現在では「グローバルヒストリー」と呼ばれるジャンルが確立し、文明の発展を人間の個人の能力ではなく、環境を主因と考えて現実世界に生じている格差を説明しようとしたジャレド・ダイヤモンドなど、多くの論者が登場するようになった。

そういった成果を活かして、気候的な変動を主因とする「長期の歴史」、社会的な変動を主因とする「中期の歴史」、政治的な変動を主因とする「短期の歴史」に分けて重層的に世界史を理解し、これらが「文明化」という無謬の方向性に「波打って」向かうという構造を演繹的な視点で設定し、生徒に説明していくことを私は試みることにした。

それに伴い、各地域・各時代で煩雑になっている時代区分・地域区分についても再設定を行うことにした。まず時代区分についてであるが、従来よく使われている「古代・中世・近世・近現代」という区分はそもそもルネサンス期のイタリアで提唱された概念であり、いわゆる「ヨーロッパ」という地域性の強いものである。そこで、私はグローバルヒストリーに対応する新たな時代概念として、私は表1のような新たな時代区分を提唱した。歴史を3区分することに対応した3種類の歴史区分であり、これを全地域に適用するのが特徴と言える。

時代を区切る基準は、長期の歴史の場合は気候的な変化、中期の歴史の場合は社会的な変化、短期の歴史の場合は政治的な変化が顕著な時期で区切っている。例えば、中期の歴史の「G-H間」・短期の歴史の「d-e間」（1840年代）には、独占資本主義の萌芽がみられるという経済的な変化がある一方、ウィーン体制の崩壊によって国民国家の形成が進展していくという政治的な変化も起こっている。

次に地域区分についてであるが、こちらも3種類で地域区分を行い、長期の歴史に対応させる形とした。その結果、小地域は39（第II期に成立）、中地域は4（第III期に成立）、大地域は1つ（世界、第IV期に成立）に分割した。ここでは、中地域を示した地図を例として挙げる（地図1）が、当時の情勢を鑑みていずれの場合も境界地帯（マージナル）な地域を設定しているのが特徴である。これらは、当時の交通技術（陸

海空）の限界を反映させており、そういった客観性の高い根拠で区分することにより、ヨーロッパ中心史観をこれまでよりも払拭するものとなっている。

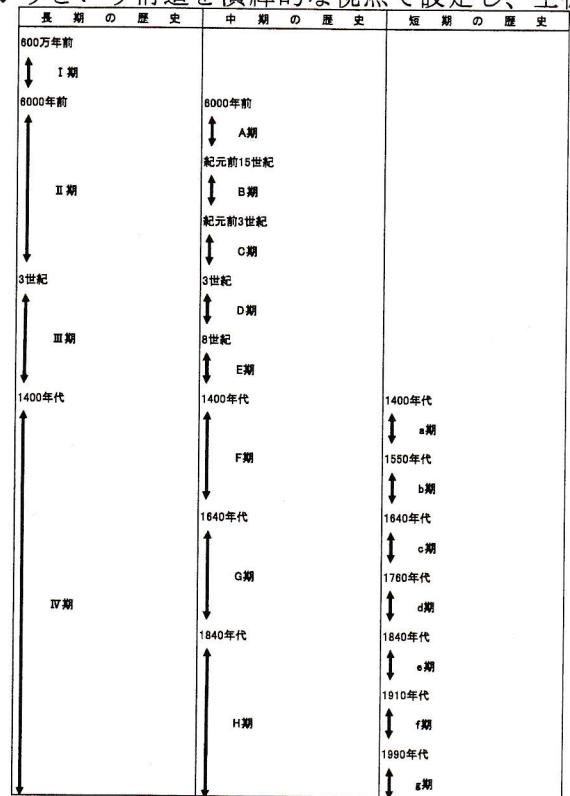
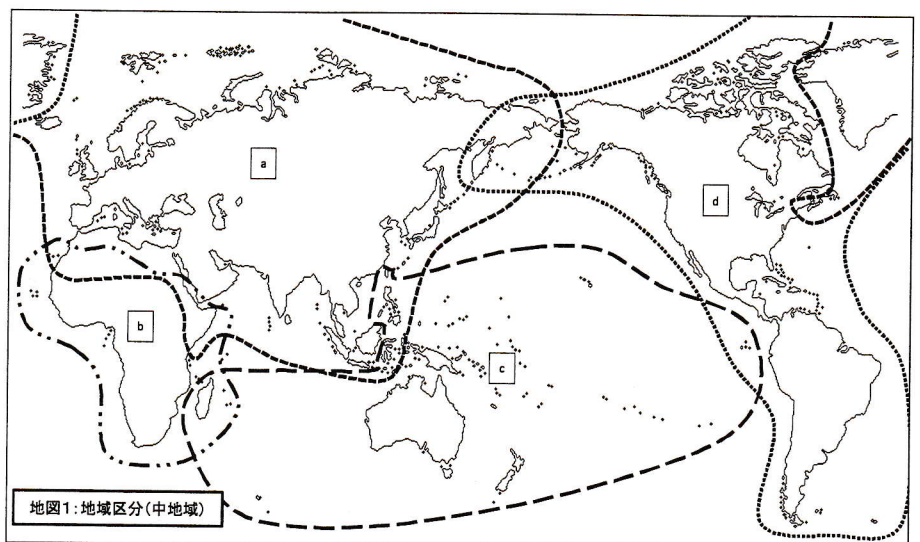


表1 時代区分



● アフロユーラシア ○ オセアニア

2 「波」の歴史の授業化の試み

前提となる授業環境は以下の通りである。

対象学年：高校3年 ※全範囲既習済み

参加生徒：9名（男子4名 女子5名）

授業時数：50分×4回

本校では、高校3年の3学期に、内部推薦が内定した生徒に対して特別講座を行っている。

「大学のプレゼミ」という位置づけという意味合いもあり、ブレインストーミングやバズセッションのルールを説明して、出来る限り生徒主体の授業体裁になるように心掛けた（写真1）。

参加生徒には予習課題が課されており、まず「文明」に関して持論を考え、個々人で時代区分と地域区分を行って行くことになっていた。

（写真2）。その上でファシリテーターを決め、参加生徒間で議論をさせて自分たちなりに「文明の定義」「時代区分」「地域区分」をまとめさせた。

最初の文明の定義については、農耕や宗教などのキーワードが挙がり、そこから私が「では何故人類は文明を成立させたのか」と問いを深めると「便利さを求めた」「安定のため」といった想定内の回答に加え、「人口が増えても殺し合いをしないため」といった、グローバルヒストリー論者が言及している点にまで気付く生徒がおり、生徒たちは格差社会など文明の「副作用」にまで触れていた。文明論についてここまで論議が深まったことは、嬉しい誤算であったといえる。

一方で、時代区分と地域区分については、私が持っていない視点からの面白い指摘があると同時に「欧米中心史観」から脱却できていない様子も見られた。今回は「4つに区分する」という前提条件を示しており、以下の結論が出た。

〔時代区分〕（写真3）

人類誕生←Ⅰ期→文明誕生←Ⅱ期→(西)ローマ帝国滅亡→Ⅲ期←第二次世界大戦→Ⅳ期→現在

「4つ」という指定があったため、Ⅱ期とⅢ期の期間が非常に長くなる結果となったが、議論の中では「大航海時代」「宗教改革」を時代の画期とするか否かが大きな話題となっていた。しかし、いずれもヨーロッパ関連の事項であり、彼らの興味・関心と既習事項のどこが定着したのかが明確に分かる

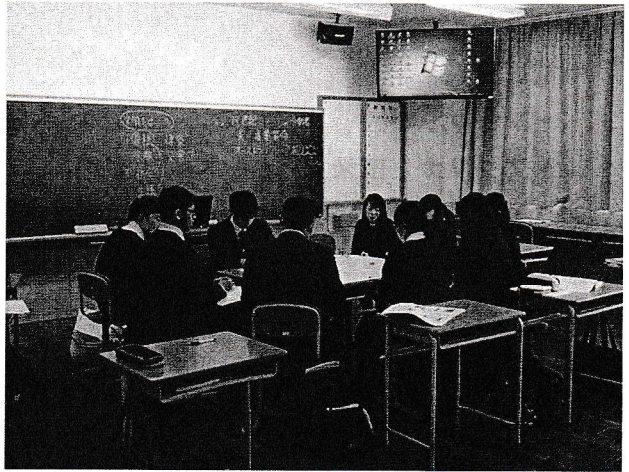


写真1 全体的な様子

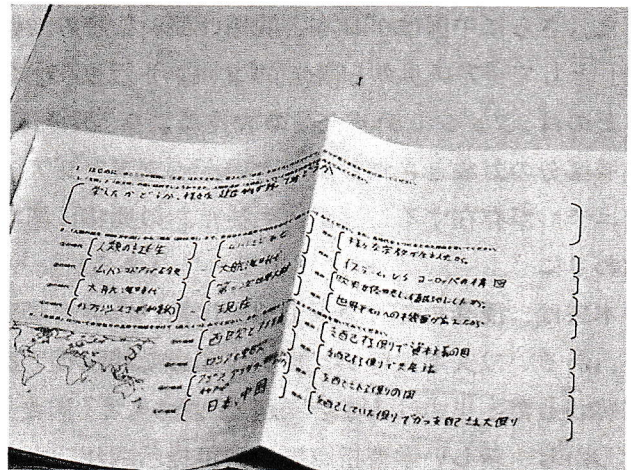


写真2 生徒課題



写真3 時代区分作業の様子

結果となった。

〔地域区分〕

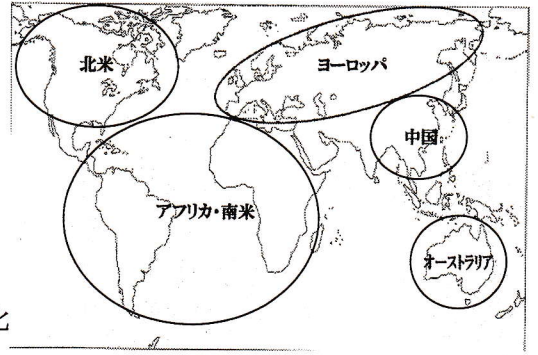
- ・ヨーロッパ
- ・北米
- ・中国
- ・アフリカと南米
- ・オーストラリア

こちらは授業時数の関係上やや時間切れになってしまったが、この分割に至った経緯を説明すると、やはり生徒の意識が如実に理解できる。

まず、生徒たちが論議したのは帝国主義時代に植民地化

「した側」か「された側」かというテーマであり、そのた

めに「した側」であるヨーロッパがまず切り離され（ロシア全体がヨーロッパと見做されているため、シベリアまで範囲が広がっている）、次に「した側に『転じた』」北米が1つのまとまりとして区分された。さらに中国は「日本と関係の深い独特の地域」としての意味合いで区分され、残りは「された側」として「アフリカと南米」「オーストラリア」に分けられた（地図2）。結果として「5」区分となったのは、ファシリテーターの成長により、教員に地域区分の枠の増加を要求したからである。また、地域区分の対象とされなかった地域（東南アジア・南アジア・西アジア・オーストラリア以外のオセアニア）が存在することが、生徒たちの興味・関心の濃淡を示唆している。



地図2 生徒による地域区分

おわりに

本来は、授業を各時期（I期～IV期）の事例研究にまで進め、さらに文章化する準備としての章立て、あるいは文章化のサンプル作成まで試みる予定であったが、自分の能力不足により不十分なままに終わった。まずはそこを課題としたい。

しかし、新しい学習指導要領案が提示され、また用語精選が新聞上などで話題になるなど「世界史をどう教えるか」という問題は、ますます巷間でも注目される様相を見せている。従って、こうした実験的な授業を積み重ね、講評でも提案されたように発表し、評価される場が増えていくことは必須であろう。また個人的な課題としては、新たな時代区分・地域設定を行ったから故の各時代・各地域の「名付け」や概念用語の「当てはめ」「創始」の問題が生じており、課題は山積している。異なる発達段階における授業実践をこれからも積み重ねていながら、それらを解決していきたい。

最後に、生徒の感想で複数の生徒が「第三次世界大戦勃発の可能性」に触れていたことを紹介する。歴史を学び、現在の米中関係や北朝鮮問題について情報を得ている生徒たちは「未来の世界」を想像する段階までに成長したのだと言える。しかし、その結果が「三度目の大戦の予測」というのは非常に多くの問題を孕んでいると言わざるを得ない。また今回の研究発表では、最後に「イースター島」を話題に挙げさせていただいた。かつてイースター島は人類がたどり着いた時点では森林が存在し、最盛期には1万人を超える人口がいたとされている。その中で有名なモアイ像も造られたのである。しかし、(別説もあるが)人口過剰による森林伐採という環境破壊が人口の維持を不可能にし、人類が到達してからわずか数百年で、現在のような、森林の存在しない閑散とした島に変わり果ててしまった。

翻って、現在人類は「地球という単位」で同じ踊り場に立っているのだとは言えないだろうか。ここで環境破壊を続けていながら、ブレイクスルーを果たせなければ、人類は全体で滅びるであろう。若い感性はその危険性に気付いて「第三次世界大戦」という言葉を持ち出したのではないかと私は考える。未来を担う若い世代にそう危惧させない「文明造り」は、我々現役世代に課された重大なテ

マと言えるのではないだろうか。

《参考文献》

George Modelski, *World Cities -3000 to 2000*, FAROS2000, 2003

アンドレ・グンダー・フランク著, 山下範久訳

『リオリエント アジア時代のグローバル・エコノミー』(藤原書店) 2000

I・ウォーラーズテイン著, 川北稔訳『近代世界システム I~IV』(名古屋大学出版会) 2013

エマニュエル・ル＝ロワ＝ラデュリ著, 稲垣文雄訳『気候の歴史』(藤原書店) 2000

グレゴリー・クラーク著, 久保恵美子訳『10万年の世界経済史 上下』(日経BP社) 2009

ジャネット・L.アブー＝ルゴド著, 佐藤次高・斯波義信・高山博・三浦徹訳

『ヨーロッパ覇権以前 上下』(岩波書店) 2001

ジャレド・ダイヤモンド著, 倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄 上下』(草思社) 2000

ジョン・D・コックス著, 東郷えりか訳『異常気象の正体』(河出書房新社) 2006

B・フェイガン著, 東郷えりか訳『古代文明と気候大変動』(河出文庫) 2008

B・フェイガン著, 東郷えりか・桃井緑美子訳『歴史を変えた気候大変動』2009

フェルナン・ブローデル著, 浜名優美訳『地中海 I~V』(藤原書店) 2004

秋田茂・籠谷直人編『1930年代のアジア国際秩序』(偕水社) 2001

秋田茂編著『アジアからみたグローバルヒストリー』(ミネルヴァ書房) 2013

秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』(大阪大学出版会) 2013

大阪大学歴史教育研究会編『市民のための世界史』(大阪大学出版会) 2014

神奈川県高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会編『世界史をどう教えるか』(山川出版社) 2008

川田順造編『新版世界各国史 10 アフリカ史』(山川出版社) 2009

木村和男編『新版世界各国史 23 カナダ史』(山川出版社) 1999

国立民俗博物館編『オセアニア 海の人類大移動』(昭和堂) 2007

佐々木寛『南からの世界史 北に覆われた南の浮き沈み』(文芸社) 2012

猿谷要『地域からの世界史 15 北アメリカ』(朝日新聞社) 1992

関雄二『世界の考古学① アンデスの考古学 改訂版』(同成社) 1997

妹尾達彦『講談社選書メチエ 223 長安の都市計画』(講談社) 2001

玉木俊明『講談社選書メチエ 587 海洋帝国興隆史 ヨーロッパ・海・近代世界システム』

(講談社) 2014

田家康『気候文明史 世界を変えた8万年の攻防』(日本経済新聞出版社) 2010

羽田正『岩波新書 1389 新しい世界史へ 地球市民のための構想』(岩波書店) 2011

水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』(山川出版社) 2008

三谷博・並木頼寿・月脚達彦編『大人のための近現代史 19世紀編』(東京大学出版会) 2009

宮崎正勝『講談社選書メチエ 18 イスラムネットワーク アッバース朝が繋げた世界』

(講談社) 1994

桃木至朗編『海域アジア史入門』(岩波書店) 2008

矢島彦一『海域から見た歴史 インド洋と地中海を結ぶ交流史』(名古屋大学出版会) 2006

安田喜憲『気候変動の文明史』(NTT出版) 2004

湯浅赳男『文明の人口史』(新評論) 1999